

## 愛によつて仕えなさい

ガラテヤの信徒への手紙 五章二節―一五節

二〇一〇年七月四日礼拝説教

秋吉隆雄 牧師

今日与えられました御言葉は、パウロが記したガラテヤの信徒への手紙（以下―ガラテヤ書）五章です。十六世紀、宗教改革を起こしたマルチン・ルターは、ガラテヤ書を「わたしの妻」と言つて愛読しました。それは、ガラテヤ書に福音の本質が示されているからです。確かに、ガラテヤ書では、福音の本質から外れて、異なる教えに傾いていったガラテヤの信徒に対して、パウロは激しい言葉で間違いを正しています。ですから、このガラテヤ書は、「怒りの手紙」とも言われています。福音の本質へ立ち帰るよう、に厳しい言葉で訴えた手紙であります。

その福音の本質とは何か。まず、モーセの律法を守り、また神の民のしるしである割礼を受けることによつて義とされる。神様から「良し」と認められる。これが第一の命題で、「律法主義」と言います。次に、イエス・キリストへの信仰によつて義とされる。イエス・キリストを信じる信仰によつて神に「良し」とされる。これが第二の命題で、「信仰義認」という言葉で言われています。そして皆さんご承知のように、第一命題ではなくて、第二命題にこそ福音の本質があるのです。ルターはこれを「信仰義認」と言いました。律法ではなく、行いではなく、信仰によつて神様に義と認められる信仰義認こそが福音の本質であると語りました。こ

れは何を意味しているかと言いますと、わたしたち人間は、良い行いをして功績を積み上げることによって神様の赦しに与り、救われるのではない。そうではなくて、信仰によって、すなわち無償の恵みによって救われる。これをパウロは「福音」と語ったのです。

今日の聖書で、割礼の問題が大きく取り上げられています。割礼は、要するに男性の包茎手術のことです。イスラエルの民は、割礼を受けることが神の民のしるしであると考えて、生まれてきた男の子に八日目に必ず割礼を施しました。これは民族の誇りでした。パウロの異邦人伝道によって、異邦人がクリスチャンになりました。すると、ユダヤ教の影響から抜けきれないユダヤ教的クリスチャンが、異邦人クリスチャンに対して、「あなた方も割礼を受けなさい」と強要したわけです。異邦人に対して、「ユダヤ人になりなさい」という強要です。パウロは、それに対して、「割礼の有無は問題ではない」と力説しています。さらに、「わたしが割礼を宣べ伝えているならば、迫害されることはなかったではありません。」「十字架の躓きもなかったであります。」「けれども、割礼を強要する者は、包茎ではなくて、「根っこから切り落とせ」と、ものすごい表現で反論しています。しかし、この表現には理由があります。ガラテヤのフルギヤ地方の最大の礼拝はキベル礼拝でした。キベル礼拝の祭司や熱烈な崇拝者たちは、自ら去勢することによって神からの義に達したいと願っていたそうであります。パウロは、明らかにキベル礼拝を念頭において、「いっそのこ

と自ら去勢してしまえばよい」と語っていると思われます。

このことから分かりますように、古代社会は宗教社会で、人々は自分が所属する宗教から、厳しい戒律、そして途方もない自己犠牲と献げ物が強要されたのです。パウロ自身もユダヤ教のフアリサイ派の学徒であったときに、「先祖からの伝承を守るのに一人倍熱心で、同胞の間では同じ年ごろの多くの者よりもユダヤ教に徹しようとしていました」と自らのことを書いています。皆このように、自分の宗教、信仰をかたちで表し、その犠牲の大きさによつて神様からの義を得たいと必死だったのです。その人々に対して、パウロは、「厳格な戒律、途方もない自己犠牲や献げ物など、人間が積み上げる功績は一切不要である。行いではない。ただイエス・キリストを信じる信仰によつて、そのまま神に義とされる」と語ったのです。これを聞いた人々は大歓喜しました。ガラテヤの人々は、その時の喜びをこう表しています。パウロの持病は大変醜くて、人の忌み嫌うものでありました。けれども、人々はパウロの語る福音を喜んで、パウロの持病を嫌うどころか、神の使いかイエス・キリストでもあるかのようにパウロを受け入れたのです。さらに、目の悪いパウロのために、「自分の健康な目をえぐり出してあなたにあげたい」と申し出る人々がいたと記されています。

人間の功績、良い行いではなくて、信仰によつて、そのままあなたがたは神に義とされる。これは、宗教によつて戒律や自己犠牲、献げ物を厳しく強要された人々にとつては、素晴らしい解放

でした。パウロの語る、無償の恵みによって義とされ、赦されるという福音は、人々を自由へと解放しました。これがパウロの伝道を大きく力強く前進させたのです。

ここで一つの問題が指摘されます。イエス・キリストへの信仰によって義とされる。そのとおりであります。けれども、「信仰によって義とされる」と言った場合、信仰が義とされる条件になる。信仰が、義とされるための良い行い、律法として捉えられてしまふ。「私の信仰の持ち方が良かったから義とされた。あなたは信仰がないから義とされない」と、信仰が義に与る条件のようになってしまいます。そうすると、信仰が功績主義、律法主義に再び陥ってしまう。ですから、次のように理解されています。信仰は、ギリシア語ではピステイスと言いますが、これは真実とも訳すことができます。ですから、「キリストの信仰、すなわち、キリストの真実によって義とされる」と訳せます。これがギリシア語の正しい訳であると言われています。「キリストの真実」はイエス・キリストの十字架と復活です。ですから、「イエス・キリストの十字架と復活によって義とされる」というのが正しい理解であります。わたしたちが信じる前に、イエス・キリストの十字架と復活があつて、それによって世界は既に神に是認されています。わたしの信仰によって義とされるのではない。わたしの信仰の前に、既にキリストの真実、十字架と復活によって義とされているのです。これが正しい信仰理解でありましょう。ただ、パウロの場合には、律法、割礼を守ることによって義とされるという間違つた福

音理解に対して、信仰によって義とされる、すなわち恵みによって義とされることを明らかにするために、信仰によって、という

表現をとったのです。

今日の御言葉は、この福音の本質が論述されています。そして、もう一步先までパウロは筆を進めています。それは、「あるがままの自分が、イエス・キリストの十字架と復活によって義とされている。」そうであるならば、あるがままのどうしようもない自分のままでよいのか、という議論が起こります。赦されているなら、そこに留まって安住してしまふ。パウロはそれに対して、「義とされた者は希望を持つ。その希望は、愛に生きることだ」と論を進めております。信仰によって義とされた者は、聖化された生活、すなわち愛に向かう生き方へと変えられていく。これが今日の御言葉で述べられている第二のポイントです。

まず前半の二節から六節までをご覧ください。「ここで、わたしパウロはあなたがたに断言します。もし割礼を受けるなら、あなたがたにとってキリストは何の役にも立たない方になります。割礼を受ける人すべてに、もう一度はつきり言います。そういう人は律法全体を行う義務があるのです。律法によって義とされようとするなら、あなたがたはだれであろうと、キリストとは縁もゆかりもない者とされ、いただいた恵みも失います。わたしたちは、義とされた者の希望が実現することを、『霊』により、信仰に基づいて切に待ち望んでいるのです。キリスト・イエスに結ばれていれば、割礼の有無は問題ではなく、愛の実践を伴う信仰こそ大切

です。」割礼を強要する人、また、律法によって義とされることを求める人たちには、キリストは何の役にも立たない、キリストとは縁もゆかりもない者となってしまおうと言うのです。割礼・律法は、わたしが何をしたかによって計られることですから、それではイエス・キリストの十字架と復活の恵みとはまったく無関係になってしまいます。わたしが何をしたかという功績によって計られる世界は、私は辛いと思います。パウロは、「律法の義については非の打ちどころのない者でした」と自分のことを語っています。自分の行いの立派さを誇るところでは、いきおい人との比べ合いになってしまいます。あの人には負けるけれども、あの人ははまりました。序列と差別の中で心安まることなく、追い立てられる。ここには平安がない。パウロは、「そのような律法主義という人間主義をやめよ。あなた方はキリストの真実によって、すなわち、イエス・キリストの十字架と復活によって、すでに義とされている。」そして「義とされた者は、希望の実現を霊によって、信仰によって待ち望んでいる。」それは、何をしたかを誇る功績ではなくて、愛の実践に生きようとする信仰、これに向かう。そしてこの信仰こそが大切であると言っています。キリストによって義とされた者は、何もしない、あるがままでよい、というわけではありません。イエス・キリストから義とされた者は、イエス・キリストの愛に従って愛の実践に向かう。これが真実の信仰であると語っています。どうしようもない自分が、イエス・キリストの十字架の死によって「良し」とされたわけですから、イエス・

キリストに向かつて生きようとする。それはイエス・キリストが  
生きたように、愛の実践に生きようとする、そういう希望に向か  
って生きる。キリストが与えてくださった義は、そのようにわた  
したちを新しい人間に変えていく、とパウロは言っています。

後半、一五節までをご覧いただきたいと思います。「あなたがた  
は、よく走っていました。それなのに、いったいだれが邪魔をし  
て真理に従わないようにさせたのですか。このような誘いは、あ  
なたがたを召し出しておられる方からのものではありません。わ  
ずかなパン種が練り粉全体を膨らませるのです。あなたがたが決  
して別な考えを持つことはない、わたしは主をよりどころとし  
てあなたがたを信頼しています。あなたがたを惑わす者は、だれ  
であろうと、裁きを受けます。兄弟たち、このわたしが、今なお  
割礼を宣べ伝えているとするならば、今なお迫害を受けているの  
は、なぜですか。そのようなことを宣べ伝えれば、十字架のつま  
ずきもなくなっていたことでしょう。あなたがたをかき乱す者た  
ちは、いつそのこと自ら去勢してしまえばよい。兄弟たち、あな  
たがたは、自由を得るために召し出されたのです。ただ、この自  
由を、肉に罪を犯させる機会とせず、愛によって互いに仕えな  
さい。律法全体は、『隣人を自分のように愛しなさい』という一句  
によって全うされるからです。だが、互いにかみ合い、共食いし  
ているのなら、互いに滅ぼされないように注意しなさい。」

ガラテヤの人々はパウロの語るイエス・キリストの真実、すな  
わち十字架と復活によって、「あるがままのあなたを神は赦し、受

け入れ、是認してくださっている」「良い行い、功績を積み上げる必要はない」と聞きました。彼らは大きな喜びの中でキリストの福音の自由を体験したのです。ところが、その後ユダヤ教的クリスチャンが入り込んできました。彼らは、たしかにイエス・キリストの十字架によつて救われるのであるけれども、やはりモーセの律法を守つて、割礼を受けなければ全き救いに与ることはできない、と言つたのです。何しろ、キリスト教の本山であるエルサレム教会から来た人々がそう言うものですから、ガラテヤの人々は心が揺らいだのです。そして律法主義に傾いていったのです。その現実に対して、パウロは、「それは福音とは違ふ。わずかなパン種が粉全体を膨らませて、キリスト教信仰とはまったく違ふ教えに傾いてしまう。目を覚ましなさい。彼らに騙されるな。割礼、律法を守つて異邦人がユダヤ人になる必要は全くない」と語つたのです。もし、パウロが、この間違つた福音を正さなかつたならば、キリスト教はユダヤ教の中にのめり込んで、世界の宗教にはなり得なかつたでしょう。パウロは福音の本質を見極めて、そこから逸脱する教えに対して敏感に反応し、激しい言葉で正そうとしています。パウロは、ガラテヤ書において、信仰義認という福音の本質を力説しました。この後半で、信仰によつて義とされた者は新しい生き方をするのだと述べています。もう一度一三節から一四節をご覧ください。

「兄弟たち、あなたがたは、自由を得るために召し出されたのです。ただ、この自由を、肉に罪を犯させる機会とせず、愛に

よって互いに仕えなさい。律法全体は、『隣人を自分のように愛しなさい』という一句によって全うされるからです。」イエス・キリストの十字架と復活によって自由にされた。宗教から強制される必要はない。他の人から圧迫を受ける必要もない。「あなたは、あなたであって良い」という自由を与えられたのです。神に義とされたわたしである。そのような自由を得た者は、その自由を用いて肉に罪を犯させる機会とはしない。愛によって互いに仕え合う。パウロは、「神が与えてくださった本来の律法というものは、自分の素晴らしさを人に主張するものではない」。そうではなくて、「隣人を自分のように愛しなさい。愛によって仕える。この方向に向かう」と語っています。

今日の御言葉から学ぶ第一のことは、イエス・キリストの十字架と復活において、「あるがままのあなたを、神は義として是認してくださいさる」、「この福音です。私はうつ病で苦しんできました。うつ病は徹底して自己否定していきます。その自己否定を超えて、神はイエス・キリストにおいて私を是認してくださいさる。これが私への福音そのものなのです。ですから、私は、信仰義認ということを、何より大切な言葉として語りたいと思っています。神に義とされた人は、「あるがままのあなたであって良い」と言われていきますけれども、必ずそこから新しい希望へと進んで行きます。それは、神がイエス・キリストにおいてわたしを愛されたように、わたしも他の人を愛したい。この方向に向かって体を伸ばそうとする。パウロは、そのことを「愛によって仕えなさい」「律法全体

は、『隣人を自分のように愛しなさい』という一句によって全うされるからです」と語っています。

ガラテヤ書を「わたしの妻」と言つて愛読したマルチン・ルターは、有名な『キリスト者の自由』という本を書いています。その冒頭に二つの命題を書いています。第一の命題は、「キリスト者は、すべての者の上に立つ自由な君主であつて何人にも従属しない」です。「クリスチャンは、イエス・キリストによって、神に義とされた。だからも侵されない君主のような尊厳ある者として認められたのだ。全く自由にされた存在である。だから、だれにも従属しない。」これが第一の命題です。ところが第二の命題は、

「キリスト者は、すべての者に奉仕する僕であつて何人にも従属する」です。クリスチャンは、全く自由な君主のような存在であるけれども、その自由は他のために仕える僕であつて、何人にも従属すると書いています。この二つの全く対立する命題の中にクリスチャンはある。これがルターの語るキリスト者の自由です。ルターは、今日のパウロの言葉からこの二つの命題を導き出していることが分かります。わたしたちクリスチャンは、人からではなく、神様からあなたはあなたであつて良いと是認されています。これ以上力強いことはないのではないのでしょうか。私はこの福音にしがみついて生きてきました。しかし、神に是認された者は、神の是認にふさわしい生き方、すなわち愛によって仕え合う、そのような生き方に向かう。そこにキリストに救われた者の真の姿がある。これが今日与えられている御言葉の内実です。

わたしたちクリスチャンは、神様に愛されているから隣人を愛する者になりたいと願う。このような望みは、今の時代から見れば、愚かな生き方に見えるでしょう。しかし、これがクリスチャンの在り方です。神様は、わたしたちをそのような者になるように召し出してくださっています。その召しに応えるというのがわたしたちの信仰であると示されます。お祈りを捧げます。

神様、聖書の御言葉、本当にうれしく思います。イエス・キリストの十字架の贖いと、イエス・キリストの復活の命によって、わたしたちはあなたに赦され、義とされてあなたのもものとされました。このことがわたしたちの大きな平安であり、喜びであり、希望であります。このことを喜びながら、日々の生活を全うさせていただきますように祈ります。そして神様、そのようにあなたによって義とされた者は、新しい希望を持ちます。それはキリストがわたしたちを愛してくださったように、わたしたちも互いに仕え合う、新しい生き方へとわたしたちを高めてくださいます。

それは、救われた者の喜びの告白であります。その告白を生きたことが出来ますように、聖霊の導きを豊かにお示しくくださいますようお願いいたします。わたしたちの教会は、先週、創立三十周年を迎えました。あなたの導き、多くの兄弟姉妹たちの労苦に對して感謝を捧げることが出来ました。そして、教会はまた新しい年度、四十周年、五十周年に向かって歩みを進めたいと願っています。どうぞ福音の真理を高く掲げて、これに向かって生きる事ができますように、教会を顧みてください。群れに招かれてい

ることを感謝いたします。群れの中には、病気の者、苦しんでいる者、またご高齢のために重荷を負っておられる兄弟姉妹たち、また様々な苦しみを負っておられる兄弟姉妹たちがおられますが、神様がみんな知っておられます。どうぞあなたの望むように、解決の道をお示しくださいますように心から祈ります。また、わたしたち日本の国が、平和を实践する国になることができますように導いてください。参議院の選挙が始まりますが、責任ある行動を取ることができますように、一人ひとりの上にあなたの導きをお願いいたします。今日から始まります一週間、御言葉に信頼して生きることができるようにお支えください。心からなる感謝と祈り、キリストの御名によつて御前にお捧げ申し上げます。アーメン

## 引用文献

聖書 新共同訳、日本聖書協会、一九八七年九月

讚美歌21、日本基督教団出版局、一九九七年四月